

日韓発掘調査交流に参加して

当研究所では、2006年度から韓国の国立慶州文化財研究所と「日韓共同発掘調査交流協約」を取り交わし、双方の発掘現場へ研究員が長期にわたり参加し、研究交流をおこなっています。今回はその3年目にあたり、筆者は慶州文化財研究所に2008年7月22日から9月19日まで派遣されました。慶州滞在中には、統一新羅の寺院として名高い四天王寺址と、4～6世紀にかけて造営された新羅古墳群であるチョクセン遺跡の発掘調査に参加しました。

まず四天王寺址の発掘調査に参加しました。ちょうど、東木塔址という塔の基壇西半分を検出する調査の最中で、その検出作業に携わることができました。調査方法は、基壇化粧に用いられた地覆石の抜き取り痕跡を探し、そこから基壇幅や基壇に取りつく階段の規模を復元するなど、日本でよく用いる方法でした。私が検出した部分の遺存状態はあまり良くありませんでした。しかし、基壇東半分は残りがよく、画像磚などが積み重ねられている様子をはっきりと分かり、それは息をのむような美しさでした。

次に、有名な大陵苑の東側に位置するチョクセン遺跡の発掘調査に参加しました。私はかねてから新羅古墳に高い関心を寄せていたので、発掘調査に参加できたことは得難い経験となりました。発掘調査現場では、44号墳と呼ばれる古墳の墳丘調査、B2号という積石木槨墓の副葬品調査、B8号という甕棺墓の調査など、数多くの経験ができました。また、写真撮影・図面作成・遺物取り上げ・遺物カード作成等、実に様々な調査過程に参加しました。発掘調査の技術・方法は日本と共通する部分が多く、日韓でそれほど大きな違いは感じませんでした。夕方、調査が終わると、現場事務所で出土遺物を熟覧させ



チョクセンB1・2・3号墳の全景

てもらい、調査員の皆さんから新羅土器を中心とした遺物資料について年代や特徴等を教えて頂き、お互い意見交換するなど、とても有意義な時間でした。

チョクセン遺跡の発掘調査に参加した感想を一言で表すことはとても難しいのですが、とにかく出土遺物の質と量に圧倒されました。滞在中に古墳踏査や古墳関連資料の探索もおこないましたが、発掘調査と資料見学等を通じ、墳丘規模にしても副葬品の質と量にしても慶州と周辺地域との差は大きく、こうした違いが明瞭に感じられました。このように当時の社会を肌身で感じとれることは、発掘調査に参加しなければ得られない体験であり、発掘調査交流の大きな利点だと感じました。

ただ、私の稚拙な韓国語では限界があったので、言葉の問題に悩むこともありました。現地の訛りが理解できずに、相手を困らせてしまったことは数知れず、最初は一人で何もできず不安だらけでした。絵による説明、身振り手振り、時には英単語まで動員して何とか意思疎通し、最後はどうか日常生活に困らなくなるレベルになって、現地の研究者と都城・寺院・古墳について意見交換もできました。

発掘調査交流は文字通りの調査を通じての技術交流はもちろん、研究者同士の交流と言う点でも大きな意義があります。

今回、韓国で多くの方に出会うことができました。なによりも韓国の方々の数えきれないほどの親切と思いやり、さらにたくさんのおいしい料理やお酒のお陰で、2か月の滞在を無事終えることができました。この思い出は、発掘調査参加という経験に勝るとも劣らない私のかけがえのない財産となりました。今後はこの経験を活かし、日韓交流の一助となれるよう頑張ろうと思います。

(都城発掘調査部 青木 敬)



油圧ショベルのバケットに乗り、遺構の撮影をする筆者